



ICRC

# ICRC 広報

クアラルンプール

第2号  
2007年1月 発行



Norman Ng / ICRC

カンタレ: キャンプ地にて避難民の女性と話をしているICRC派遣員、長谷川 あすかさん

## 読者の皆様へ

本誌、ICRC広報第2号は2007年度の資金面に焦点を当て、全体の予算およびアジア太平洋地域の予算の内訳に関する情報を掲載しています。また、ICRCが世界各地で実施している主な活動内容について簡単に説明します。

予算を基準にした状況分析が示すように、今日の武力紛争の展開は予測することがますます困難な状況になっています。その中で、数少ない国家間戦争に対し、内戦が増加する傾向にあります。このような国内的な紛争は、武力行為の実施に異なる動機を持った様々な立場のグループが関係しており、非常に複雑な状況が絡み合っています。

このような予測不可能な状況において、赤十字国際委員会 (ICRC) の世界80地域の代表部と事務所のネットワークが大きな意義を持ちます。組織が対抗する反対勢力によって拒否される、もしくはそれ以上の攻撃行為を受けるかもしれないという危機に絶えずさらされていることも事実です。また一方で、政治的・軍事的政策を意識した人道活動をその手段として利用しようとするグループも確かに存在します。こうした厳しい環境下でICRCは、武力紛争の全ての犠牲者に接近し、その維持に重点的に取り組む、中立かつ独立の立場からのアプローチがもたらす付加価値を示すことができるよう、懸命の努力を続けてまいります。

スリランカでの活動は、幅広い範囲での人道上のニーズに対し、包括的に対応していくというICRCの活動方針を実証しています。中立の立場での仲介者としての役割によって、民間人や必需品が国を隔てる前線を定期的に越えることが可能になりました。

ICRCが第一に優先しているのは、武力紛争や自然災害によって行方不明となった人々の安否調査を行う活動です。この活動は、離れ離れになった家族が再び連絡を取り合い、再会を実現することができるよう、強固なグローバル・ネットワークを構築するため、183の赤十字社・赤新月社と協力して実施されています。日本においては、2007年にICRCはそのネットワーク強化に向けて、日本政府および日本赤十字社とよりいっそうの協力を行ってまいります。

最後に、本誌第2号ではクアラルンプールにあるICRC代表部で実地経験を積んだ日本人インターンの片岡昌子さんによる記事を集めています。

本誌第1号に多くの皆様から反響をいただきました。より良い広報にすべく、今後も改良を重ねていきたいと考えておりますので、ご意見やご要望などをお聞かせください。ご支援の程宜しく申し上げます。

赤十字国際委員会 (ICRC)  
クアラルンプール地域代表部首席代表  
ワーナー・カスパー (Werner Kaspar)

# 2007年ICRC緊急要請



Norman Ng / ICRC

## 資金の使い道は？

ICRCは2007年も引き続き、抑留者の生活環境や待遇の監視、戦争犠牲者である文民の権利尊重の擁護、行方不明者の安否調査活動に注力した保護活動を強化します。また、武力紛争下における国際人道法に関連した活動を推進するために、よりいっそう努力を尽くしていきます。加えて、ICRCは抑留者を含めた人々の基本医療や病院管理の能力を強化します。そして、赤十字社・赤新月社が果たす重要な役割を念頭に置きながら、支援を必要としている人々に適切に対応できるよう、他の人道機関と協力していきます。

紛争は、私たちの生活の様々な側面に影響をもたらす予測不可能かつ世界中に広がっている現象です。イラク、スーダン、スリランカ、ミャンマー、ソマリア、コロンビアなど世界中の至る所で、日々残虐行為が横行し、何千もの人々が住む場所を奪われ、暴力が蔓延しています。これらに対し有効な活動を実施するために、赤十字国際委員会 (ICRC) の対応はグローバルなものではなればなりません。ICRC総裁であるヤコブ・ケレンベルガーは最近、「ICRCが直面している大きな課題の一つとして、極めて多様化している環境において被災者のあらゆるニーズに対し、効果的に対応していくことが挙げられるのではないかと述べています。

昨年2006年も例外ではなく、レバノン、イスラエル及びパレスチナ地域、スリランカ、ソマリア、東ティモールにおける新たなまたは突発的人道的危機に対し、ICRCは迅速かつ包括的に対応に当たりました。離散家族の再会活動および抑留者の訪問を80以上の国々で実施し、また紛争によって犠牲を強いられている人々の尊厳を回復し、彼らに希望を与えるために保護と支援のプログラムを実施しました。

ICRC総裁ヤコブ・ケレンベルガーは資金供与者に対する年次要請の発表の際に、「多様化と厳しさを増す武力紛争の状況および世界中のその他の形態の武器を用いた暴力に対し、専門的な人道支援を提供することが我々に課せられた挑戦である」と述べました。

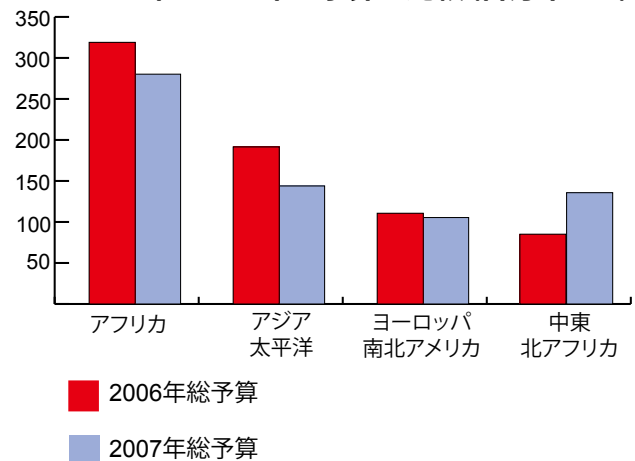
しかし、ICRCは資金供与国や各国赤十字社・赤新月社、民間部門からの支援なくしてこれらの活動を有効に実施することはできません。欧州委員会、アメリカ、イギリス、スイス、オランダ、スウェーデンが引き続きICRCの主要な資金源です。また、日本政府および日本赤十字社からは2,000万米ドルが供与されます。ICRCの2006年の現場予算は7億4,100万米ドルから始まり、緊急の人道危機に対応するために年間で7回にわたり合計1億1,900万米ドルの追加予算が必要になりました。

そして今年、ICRCは現場活動の当初予算として、資金供与者に対し6億9,800万米ドルを要請します。2006年の当初予算に比べ約4,300万米ドル少なくなっていますが、これはスーダン、パキスタン、ミャンマー、ネパールなどでの計画の予算が削減されたためです。一方で、イスラエル及びパレスチナ地域、イラク、アフガニスタン、チャド、コンゴ民主共和国、ウガンダ、コロンビアなどでの支出額は増加する予定です。

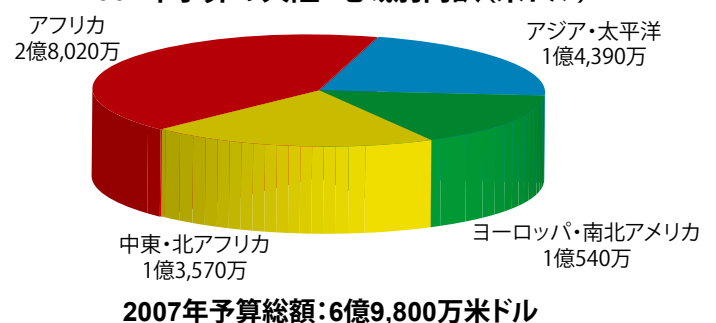
スーダンは4年連続で最も多くの活動が実施される地域となり、イスラエル及びパレスチナ地域、イラク、アフガニスタンがそれに続きます。アジア太平洋地域においては、パキスタンでの2005年に発生した地震後の復興活動、アフガニスタンやスリランカで増加の一途をたどる紛争の数々、フィリピンやタイ南部での武力行為などに対し、多くの人的・金銭的資源が必要になります。また、ミャンマーでは文民や抑留者の保護に関する懸念が浮上しています。

これらが2007年から2008年にかけてICRCが取り組む課題です。紛争の犠牲となった人々の苦難を軽減するために、私たちは資金供与者や人道活動に携わるパートナーからの支援を必要としています。

### 2006年と2007年の予算の比較(百万米ドル)



### 2007年予算の大陸・地域別内訳(米ドル)



# 現場レポート:スリランカ

## 概況

政府治安部隊(SLSF)とタミル・イーラム解放の虎(LTTE)との間の再開された内戦によって、文民たちはさらなる犠牲を強いられ、新たに数千の家族が住む場所を失いました。過去3ヶ月間にわたるヴァカライでの激しい戦闘に巻き込まれた35,000人の避難民のうち、約15,000人が戦闘地域を逃れ地区南部にある政府管理地域にたどり着くことができました。現在、避難民は36ヶ所に分かれて収容され、スリランカ政府並びに人道機関からの保護を受けています。また一方、4,000人の文民がトリンコマリー県東部での戦闘から逃れてカンタレの町に到着し、付近の学校や寺院などで避難生活を送っています。

## カンタレでの思い出

長谷川 あすか

スリランカ東部のトリンコマリー県ムトゥールで、また新しい一日が始まりました。人生に辛うじて残された物すべてを守るために、人々はもう何日も歩き続けていました。男性、女性、そして子供が歩くその行列は、さながら悲しみの色に彩られた虹模様のように、その虹はカンタレへと向かって、ゴールデンビーチから徐々に遠ざかっていきました。彼らは、長引く紛争から逃れるため身の安全を優先して、住み慣れた家と避難場所になるテントを交換しました。カンタレには、その田地に広がるようにして立てられた仮設キャンプがいくつもあり、45,000人の国内避難民を収容することができました。そこの赤十字国際委員会の役割は、難民たちの到着を見届け、救援活動を行うことでした。



2006年8月18日、あの日はあんなに早い時間にトリンコマリー県にいる予定ではなく、ましてやあのキャンプに避難民たちと一緒にいるはずではありませんでした。偶然重なった幸運が、そこに避難していた難民と私とを引き合わせたのでしょう。トリンコマリー県に2時間後に到着するはずのICRCシャトルを逃した私は、途中にあるカンタレのアルタリクキャンプに立ち寄ることになりました。キャンプに着くと、それぞれに要求や要望を持った数百人の人々にぐるりと取り囲まれました。

その中で、年老いたおばあさんが一人私に近づいてきて、眼鏡が欲しいと言っています。「爆撃から逃げている時に、眼鏡を失くしてしまいました。」私がおばあさんを見つめると、どうやって家族とここまで逃げたのかを話してくれました。

「目がよく見えないので、日常生活で困っているのです。」看護婦経験から私は思わず本能的におばあさんの目から自分の腕を遠く離し、1本だけ立てた指をおばあさんに見せて何本かを数ね、順に2本目、3本目の指を立てて見せました。最初、まわりにいた人々にはやにやにやしてそれを見ていましたが、このテストが進むにつれて、人々はだんだんと盛り上がり、やがて笑い声が大きくなりました。そのおばあさんも興味津々で、簡単な診断を終えた頃には、すっかり群衆と一緒に笑っていました。私は、ICRCがすぐに新しい眼鏡を用意することはできないことをおばあさんに説明し、数時間後には何かそれに代わるものを用意することを伝えました。おばあさんはわかってくれたようで微笑みを絶やすことなくうなずきました。この出来事によって、彼らは苦くて辛い状況をほんの数分の間だけでも忘れることができたようでした。

私は、おばあさんの要求に対して積極的に応えることはできなかったわけですが、避難民たちの傷ついた心に楽しいひと時をもたらすことができたことを幸せに感じました。一瞬でも彼らの悲しみを忘れさせることができ、そして希望という名の井戸を作るための煉瓦を、また一つ積み上げることができたのです。食料品以外の救援物資、避難所、飲料水などを提供することだけが、私たち赤十字国際委員会の務めではないのです。関心を持ち、耳を傾け、希望をもたらすことが、日々の活動の基本なのだと思います。



ICRC delegation ICRC sub-delegation ICRC office

## ICRC活動状況(2006年12月20日現在)

- イタリア赤十字社の協力の下、負傷した30人の文民をヴァカライから政府管理地域にある設備のより整ったヴァラチェナイ病院へポートを使って搬送・避難。
- キリノッチにある医療機関で10日間にわたって実施された「チクングンヤ熱・ Dengue熱管理週間」をサポート。その他にも、包帯や注射材などをカンタレ基地病院に寄付、またバチカロアやジャフナにてスリランカ赤十字社が派遣する移動医療チームへの支援を続行。
- ヴァカライでの戦闘から逃れてバチカロア地区の政府管理地域にある避難所を目指していた500以上の家族を支援。アランクラムやキラムに逃れた避難民に対し、テント、避難所、仮設トイレ・衛生施設、配水ポイントを支給。
- 350以上のテントを支給、また300以上の避難所を開設するために必要な建築資材を配給。同敷地内に40の仮設トイレ・衛生施設を設置。配水ポイントを数箇所設け、一日あたり2万リットル以上の飲料水を各所に配給。
- カンタレ、ヴァカライ、ジャフナ、ティルナガル、トンダマナガル、ベサライ、カンダヴァライ、キリノッチなどに居住する数千人の避難民に対する基本的援助。(例えばマット、ゼリー缶、衛生キット、その他生活に必要な家財道具などを支給)バチカロア地区では、スリランカ赤十字社のボランティアと協力を行い、チャンガラディ地区、アランクラム、ウルガマムの避難家族をサポート。
- 紛争による離散家族間の連絡回復と再会の実現に向け、スリランカ赤十字社と緊密に協力。2006年12月1日以降、179通の赤十字通信(家族間メッセージ)を収集、212通のメッセージを家族へ送付。
- 38ヶ所の抑留場所を39回にわたり訪問、294人の抑留者の登録手続きおよび個人面談を実施。
- 中立の立場での仲介者としてオマンタイ、ウィランクラム間にて約1万人の文民の越境を支援。

## ICRC地域代表部でのインターン体験

「あらま!」街中でも職場でも、驚いたマレーシアの人がこうつぶやくのをよく耳にします。この国に来てインターンを始めてから3ヶ月。今日はインターンの仕事の中で経験したたくさんの「あらま!」の中からいくつかをご紹介します。

国際法と人道援助について大学院で学んだ後、私は、赤十字国際委員会 (ICRC) クアラルンプール地域代表部でインターンをする機会を得ました。この地域代表部は、マレーシア、シンガポール、ブルネイ王国、そして日本の4ヶ国を直接の対象国とするだけでなく、アジア・太平洋地域の他の国々にあるICRC事務所の活動支援も行っています。それぞれの国における、国際人道法の普及および国内実施の促進等が主要な任務です。国際スタッフの多くは、中国、ヴェトナム、フィリピン、フィジーなどなど、マレーシアを起点にあちこち飛び回っています。彼らのパワフルさにはいつも驚かされます。

ここでの私の第一の仕事は、日本を担当するスタッフの補佐です。スタッフの日本訪問を前に、連絡調整のサポートや基本情報の収集を行います。また、日本においてジュネーブ諸条約等の国際人道法の国内実施がどの程度すすんでいるのか、さまざまな資料から得た情報をまとめ、報告することも大切な役割です。日本人であることは日本語資料の収集が可能な点などで利点が多い一方、事務所で唯一の日本人としての責任も感じています。

日本に関する活動のほかに、マレーシアでICRCが行う活動を手伝うこともあります。2004年のインド洋大津波で多くの犠牲者がでたインドネシア・アチェ州。マレーシアにはそのアチェ州出身の人たちが多く住んでおり、津波発生後、ICRCにはたくさんの人からアチェにいる家族を捜索してほしいとの依頼が寄せられました。その経験から、ICRCはマレーシア赤新月社と協力して、自然災害時等における家族の安否調査について、国内の能力構築を図っています。その第一段階としてICRCスタッフが行っている現地調査に同行し、大都市とは異なる地方の様子に触れることもできました。また、ICRCが活動をするうえで、国内の赤十字・赤新月社の存在がとても重要であることも知ることができました。

ICRCでの毎日は、とても刺激的です。スタッフから学ぶこともとてもたくさんあります。国際スタッフの多くは、法律や教育、報道などの各分野での長い実務経験を持ち、紛争下の中東やアフリカなどにおいて実際に人道援助活動を行ってきた人たち。彼らとの会話を通し、「平和」がいかに重要で貴重なものなのか、あらためて気づかされます。また現地スタッフは、さまざまな民族、宗教、文化が共存するマレーシアについて、いろいろなことを教えてください。これからも「あらま!」を楽しみつつ、多くのことを吸収したいと思います。



赤十字国際委員会 (ICRC) クアラルンプール地域代表部  
インターン  
片岡 昌子

## 追加議定書30周年記念

2007年6月8日、ジュネーブ諸条約追加議定書はその採択から30周年を迎えます。第1・第2の2つの追加議定書は、国際的武力紛争および非国際的武力紛争による犠牲者の保護をさらに強化するため、1977年に制定されました。戦場での新たな形態、特にゲリラ闘争や近代兵器の出現などを踏まえて、文民および戦闘員に対する保護の改善を目的としています。

追加議定書の基軸として、紛争当事者はいかなる場合も文民たる住民と戦闘員、そして民用物と軍事目標とを識別するべきであることを要求しています。

今日の紛争形態の大多数を占める非国際的武力紛争に関して、武器の使用制限や個人の保護に焦点を絞った初めての協定が第2追加議定書であり、捕虜や抑留者を含む戦闘行為に従事していない人々、あるいはもはや従事していない人々の基本的な保障を定めています。

現在、194ヶ国がジュネーブ条約に加入しており、これはつまりジュネーブ条約が世界的に認められた国際条約であることを示しています。そして、第1追加議定書には166ヶ国が、第2追加議定書には162ヶ国が加入しています。日本は2004年に両議定書に加入しました。ICRCは2つの追加議定書をジュネーブ条約と同程度にまで普及させることを目標としています。

この記念すべき30周年を機に、特に紛争犠牲者である文民の保護など、2つの追加議定書がもたらす影響力や意義、その重要性を再確認していただ

## フィリピン大統領賞受賞

2006年12月7日にフィリピンのマニラにおいて、ICRCはグロリア・マカバガル・アロヨ、フィリピン大統領より、フィリピン個人・団体海外部門で大統領賞を授与されました。1991年に創設されたこの賞は、「海外在住のフィリピン人支援のために尽くされた類まれなる努力または優れた功績」を対象に年に二度表彰されています。この度ICRCはレバノンで就労・生活するフィリピン人のためのファミリー・リンク・ウェブサイトを開設した功績によって表彰されました。紛争の当初は3万人以上のフィリピン人労働者がレバノンに駐留しており、ICRCマニラ代表部が推進するこのウェブサイトは多くの家族によって利用されました。



赤十字国際委員会 (ICRC)  
クアラルンプール地域代表部  
Unit 50-11-1, Level 11,  
Wisma UOA Damansara  
No. 50, Jalan Dungun  
Damansara Heights  
50490 Kuala Lumpur  
Malaysia  
T: +60(3) 2084 1800 F: +60(3) 2084 1999  
E-mail: kuala\_lumpur.kua@icrc.org  
Website: www.icrc.org



Website: www.jrc.or.jp